

「近代」：西欧と日本の比較構図

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

《以下、作図に際しての略号化》

「支配＝被支配の自己」・集团的自我・「九十九匹」・・・・・A
神に従属する自己・個人の純粹性・個人的自我・「一匹」・・・・・B
全体・絶対・神・・・・・・・・・・・・・C
自己完成・自己全体化・自己主人公化・個人主義化・・・・・C”
宿命・神意・天命・秩序・文化・・・・・・・・・・D 1
信仰・自己劇化・演戲・自由意志・自己主張・・・・・・・D 2
実在感・必然感・全体感・生き甲斐・充実感・・・・・・・D 3

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

【西欧近代】と「近代」日本人の精神性(その構図的比較)は
次ページ以下に。

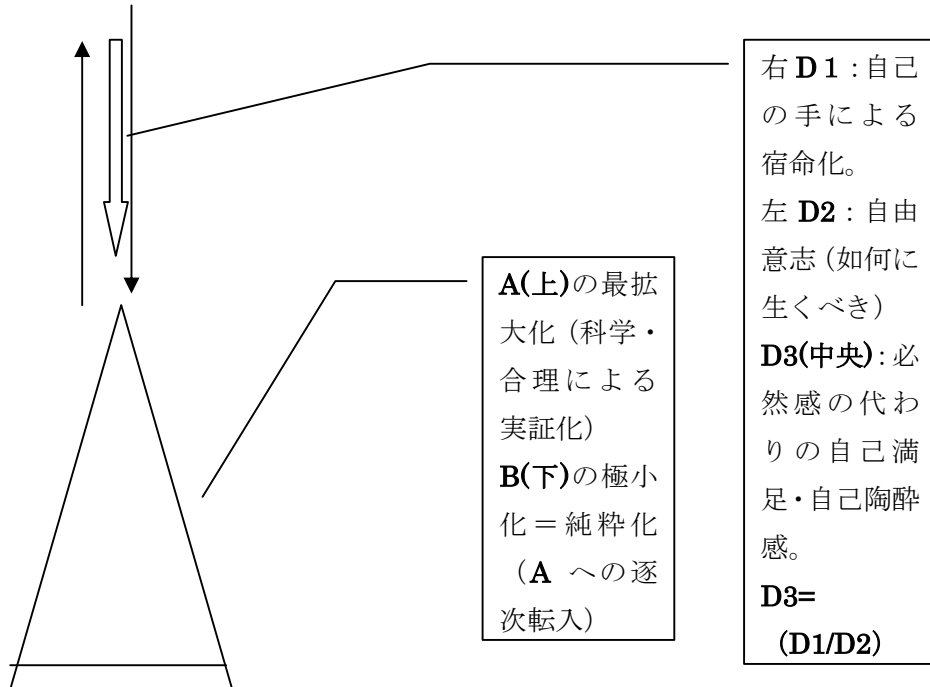
【西欧近代】

《十九世紀》近代自我：個人主義と言ふ名の「動きまはる影・あはれな役者(マクベス)」

~~~~~

・ (C) . . . 神（主人公）は背景へと遠ざかる

・ (C'') 個人主義（自己主人公化・自己全体化：神に型どれる人間の概念の探求） . . . 宿命(神意)からの解放



「近代」日本人の精神性(その構図)は次ページ。

「近代」日本人の精神性(その構図)・・・上記西欧近代構図と要比較  
(全1 P 6 3 7 『現代人の救ひといふこと』から)

「(日本小説の)作者たちから生活苦をとりのぞき、栄誉ある社会的地位を与えてやつたならば、いつたいそのうちのいくたりが文学に求道の忠実を誓つたであらうか。近代日本にあつては、文学(B)すらも文明開化の出世主義(A)のネガティブな吐け口になつてはゐなかつたか」。

明治以来の殆どの私小説家が将に以下のこの構図の世界と、恆存は『近代日本文学の系譜』中で述べてゐる。

故に、以下構図の二つの○が交錯する満足状態(文明開化の出世主義[A]の客対化的状態)になれば、救ひとして求めたBは不要となり、A満足 of 幸福に浸る。その意味で、「ぼくたち(日本人)のうちに政治(A:支配=被支配の自己)では救ひえぬどんな苦悩が存在してゐるといふのか」と言ふことになるのである。元々B(文学・芸術・宗教)への救出願望そのものが不純なのである。

さうした状況下(「相対主義の泥沼」)においては、「いかなる苦悩も、いかなる罪も、いかなる悪も、いかなる退廃も墮落も見いだせぬ」。と同時に「救はるべきいかなる地獄ももちあはせてはをらぬ」と言ふことになる。Aが満足状態(生活苦の解決)になれば、元々不純であつた以上の問題は霧消するからである。

「近代ヨーロッパのリアリズム小説において、その精神的苦悩は物質苦に触発せられてゐたにしても、その苦渋の最後の一滴までも物質苦に還元溶解せしめられない」と言ふ、上図の西欧近代自我(個人主義)構図とは、下図の精神主義的構図を持つ近代日本は、其処に違ひが厳然として存在するのである。実証精神あるが為、近代の宿命として辿り着いた、上図の西欧近代自我(個人主義)構図と、文明開化の出世主義(A)のネガティブな吐け口として救ひを求めた精神主義(B主義)的構図との明確な違ひが。

即ち両者の違ひを決する処の、西欧リアリズム作家が持つ「苦渋の最後の一滴までも物質苦に還元溶解せしめられない」内容とは、彼等の根底には「**夢想＝神に型どれる人間の概念の探求**」が厳として存在してゐる事にある。そしてその不在が日本なのである。その事を恆存は以下のやうに述べてゐる。

「十九世紀末葉から現代にかけて、かれらの精神が『現代人の救ひ』を求めつつ漂泊をつづけてゐるとすれば、それは実証主義がかれらの自我のうちから追放した神に型どれる人間の概念の探求でなくしてなんであらうか」と。

(全1 : P 6 3 7 『現代人の救ひといふこと』)

## 「近代」日本人の精神性：その「精神主義」的構図

《以下の図の説明》

上（Aの領域）の○二つは左が社会（客体）右が自己(主体)。その二者が離れてゐる、即ち不満足(非客対化)的状态。そこからB（文学・芸術・宗教）への逃げ込みが始まる。・・・「弱者の歪曲された優越意思」（ロレンス）と言ふ、洋の東西を問はぬ人間が持つ普遍的な劣勢心理。

